

TPDS NEWS



※ TPDS = Tokyo Plastic Dental Society = (一社) 東京形成歯科研究会

Vol.24

配信日：2021年3月2日

配信元：(一社) 東京形成歯科研究会 事務局

北信ローカル 記事紹介

“ メジロの視力表？ ”

相談役・理事 北村 豊 先生

当会の相談役・理事 北村豊先生からご提供いただいた記事をご紹介します。

記事の内容につきましては、別紙※(Emailの場合：別添)(Faxの場合：本状含め2枚目)の通りでございます。

※ 別紙 出展元：北信ローカル 2021年(令和3年)2月26日(金曜日) 発行

下記、北村先生から頂戴したコメントです。

「コロナの影響もあり、昨今は会員同士がなかなか顔を合わせる機会がなくなりました。また、新入会員もおられるのでこのような歯科とは関係ない掲載記事でも良いですし、書きやすいところでは、先生方の趣味や地域、さらに地域の特産品など何でも構いませんので書いて頂くのはいかがでしょうか？

それを通して会員同士がより親睦を図れる場になることはとても意義のあることだと思います。」

事務局より

会員の先生方から情報提供くだされば、その都度、施設長に相談して、本「TPDS NEWS」にて配信させていただきます(施設長より)。従来は、歯科・医科に関する内容を配信しておりましたが、北村先生のご指導もあり、本「TPDS NEWS」を会員・関係各位の交流の場(ツール)として活用していただくことを目的に、配信する内容(企画)の幅を拡大することと致します。お気軽に「TPDS NEWS」の材料(ネタ)を事務局まで(下記)ご提供いただけると幸いです。ご検討の程、何卒宜しくお願い申し上げます。※反社会的内容等の場合は、配信を断念する場合もございます。予めご了承願います。

〒114-0002 東京都北区王子 2-26-2 ウェルネスオクデラビルズ 3F

一般社団法人東京形成歯科研究会 事務局 押田 浩文 Hirofumi Oshida

Email: okudera@carrot.ocn.ne.jp

TEL:03-3919-5111/FAX:03-3919-5114

メジロの視力表？

信州口腔外科インプラントセンター 北村 豊



庭の栗の枝につき刺したリンゴや、吊るしたリンゴ、そしてヒエやアワの餌には、毎日沢山の鳥がやって来てくれる。三密を避けるようにいわれる昨今だが、鳥の世界は自由で、一密(リンゴ)？を求めてやってきて、ソーシャルディスタンスゼロになることも多い。リンゴだけは、食料の少ない晩秋から春先までの唯一の季節限定の野鳥用レストランのメニューだが、それをついば愛らしい中に

も凜とした野鳥の姿は、診療所に来院される患者さんや、私達スタッフの目を楽しませ、さらにそれを観察する者の心を豊かにしてくれる、と感じているのは私だけだろうか……。

日本では冬鳥で、今年は1月中旬頃より毎日来て同じ枝に刺したリンゴの指定席が大のお気に入りです。常連客だった「ツグミ」も、ヒヨドリとの出現と共にパタリと来なくなつたのはとても淋しい。もちろんのこと、幼稚園児のように名札がぶら下がっていなかったの定かではないが、同一個体が毎日一羽だけで飛来していた可能性が高いと推測している。

例年だと早くから当院の庭にも来るヒヨドリが、今年はリンゴをついばみにな

かなか来なくて、他の鳥も追い払われずに安心して食事している風景を内心では喜んでいたのだが2月初旬からついに来るようになってしまった。ほかの小鳥たちは、ヒヨドリには一目も二目も置く鳥で、その餌場を独占しようとする野鳥たちを追い払おうとする性格を除けば、姿はなかなかスマートで美しいとは私も認めているのだが……。

先週の土曜日に、診療所の裏のお茶の木の垣根の近くで元気のいいメジロを保護した。外敵に襲われた形跡もなく、放鳥すると近所に多いネコに食べられることも懸念して、野鳥を飼ってはいけなことを知りつつ、週末でもあったので仕方なく保護することとし、

わたくしの家で二泊三日、三食付きで療養して回復した。手の中に抱いてこのメジロをごく間近にわくわくしながら観察するのは初めての経験だったが、容姿端麗で才色兼備な美しい鳥だとつくづく思った。

この鳥の名前の由来ともされる眼球の周囲の「白いアイリング」は、眼を中心の外に伸びる花卉のような、人によっては刺繍のような繊細な純白の羽毛で縁どりされているのに気付く。しかし、このアイリングがくちばしに近い前方で一部切れていることをご存知だろうか？そのアイリングの形状は、皆さんにも眼科などで馴染みの、「大小の円形の一部が途切れた視力表」の「ランドルト環」をイメージさせる形状をしている。

日本で観察できる野鳥の中でもかなり小形の種類に入るメジロのアイリングの前方部が途切れていることに気づくことは、裸眼もしくは矯正視力をもった「日本人」でも野鳥観察のための双眼鏡や望遠鏡を使わなければほとんど不可能と思われる。しかし、アフリカのタンザニアに暮らすバツサ族には視力11・0という驚異の記録を持つ人もいるそうである。その視力とは55m先から1・45ミリのランドルト環の狭い切れ目の方向が確認できるといふ、驚異的な視力であるのだ！保護した時に撮影したメジロの写真から推定すると、その切れ目は実物で1ミ位とさらに狭く、タンザニアの視力11・0の人ならば、30m位離れたところからでも、この小さな野鳥のメジロの「アイリング」の前方が切れていることを容易に確認できるのではないだろうか……と思っている。



しかし、タンザニアの都市部で生活する人では、視力は1・0前後となるそうで、いわゆる「都市化や文化的生活で失くしていくもの」には視力の低下のみならず、「数多くの有形無形の大切なものを失っていく環境」にほとんどの日本人が置かれていることにも気付いておくことは肝要であると考えられる。